

## 恩納村の言語地図について（中間報告）

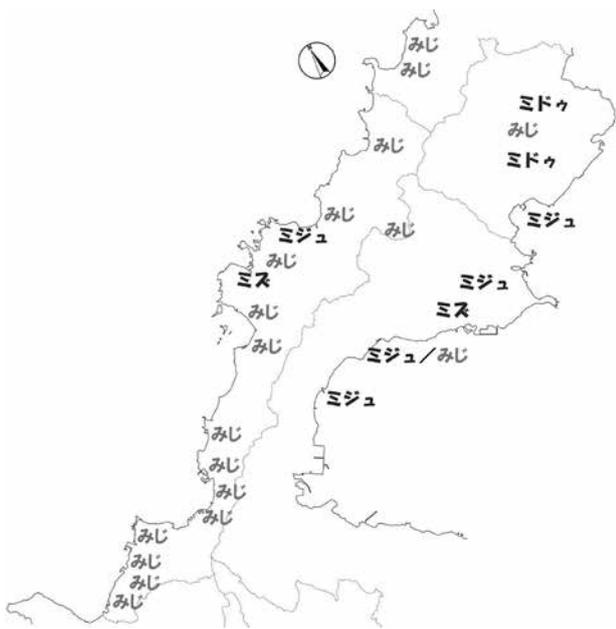
恩納村史「言語編」専門部会 副部会長 西岡 敏

琉球列島には、人が住んでいる島がおよそ50あり、それぞれで異なる言葉が話されてきました。その異なりは、島と島との間だけではなく島の内部、集落と集落との間にもありました。「しまくとぅば」とは、海に囲まれた島の言葉のみならず、「シマ」、すなわち、「集落」「村」「生まれ故郷」を指す言葉でもあります。その「しまくとぅば」は、老年層のみが使う言葉となり、若年層では「話す」ことはもとより、「聞く」こともできない人々が増えていると言われています。こうした状態は「危機言語」（消滅の危機に瀕する言語）と呼ばれ、2009年、ユネスコが、琉球列島において、「奄美語」「国頭語」「沖縄語」「宮古語」「八重山語」「与那国語」の6つの言語を「危機言語」として指定しています。現在、「危機言語」の状態から脱するために、沖縄県をはじめとして、各市町村において様々な取り組みが行われています。

現在、恩納村史編さん委員会でも、言語部会において『恩納村史 言語編』の執筆を進めており、恩納村における伝統的な方言の記録・保存を進め

ています。恩納村の方言は、先ほどのユネスコの分類で言つと、ちょうど「国頭語」と「沖縄語」の境界部に位置しており、村内における各集落の方言がどういった特徴を持っているかについては、研究者も注目するところとなっています。

『恩納村史 言語編』では、現在、恩納村を中心とした「言語地図」を作成中です。「言語地図」とは、ある単語の語形が、各地域でどのように違って言つかを地図の中に落とし



「水」の言語地図

込み、その分布の特徴を視覚的に明らかにしようとするものです。従来の「言語地図」では、この語形を記号化して表すことが多かったのですが、今回の「言語地図」では、単語全体の語形を提示することで、各集落の語形がたちどころに一瞥できるような工夫を凝らしています。ここではまだ作成途中ですが、名詞から一つ、動詞から一つ「言語地図」を表し、その単語語形の分布が語るところを説明してみたいと思います。

まず、採り上げるのは、名詞で「水」という単語です。この単語を「言語地図」にして分布を見てみましょう。

「沖縄語」「国頭語」の範囲に属する地区では、